

リベルタン文学とフランス革命

—『女哲学者テレーズ』を通して—

関 谷 一 彦

I. はじめに

リベルタン文学が18世紀フランス社会のなかでどのような役割を果たしたのかはよくわかっていない。ましてや、フランス革命に影響を与えたかどうかは闇のなかである。しかしながら、18世紀フランスでよく読まれたリベルタン文学が、フランス革命に影響を与えたのか否か、与えたとしたらどのような影響なのかを考えることは、フランス革命の起源を考えるうえでも面白い問題である。ロバート・ダーントンは、『革命前夜の地下出版』や『禁じられたベストセラー』のなかで、18世紀にフランス人は何を読んでいたのかを調査して、フランス革命の起源の問題にアプローチしようとした。彼は、スイスにあるヌシャテル印刷協会 (Société typographique de Neuchâtel) の遺された資料、また警察文書、バスチーユ文書、書籍商組合文書などの書籍取引の管理と取り締まりに関する莫大なパリの古記録を渉猟する¹⁾。彼が調査するのは、「哲学書」と当時呼ばれていた非合法出版物 (発禁本) である。ここには文字通りの哲学書もあれば、猥褻本、あるいはこれらが混じり合ったりリベルタン文学も含まれていた。そして、ダーントンが出した結論は、「哲学書」は、世界を転覆させることを大声で求め、1789年を準備したというものであった²⁾。つまり、「哲学書」はフランス革命を準備する役割を果たしたという結論を導くことになる。こうしたダーントンの結論に対して、ロジェ・シャルチエは『フランス革命の文化的起源』のなかで、ダーントンの研究成果を評価しつつも、「哲学書」のベストセラーを探すよりもそれが読者にどのように読まれたのか (appropriation³⁾) の方が重要だと指摘する。彼が強調するのは、読みの多様性である。シャルチエはまた、「哲学書」がフランス革命を準備したというよりは、「哲学書」を受け入れる準備が整っていたからこそ広く読まれたと主張する。つまり、「哲学書」の結果フランス革命が起こったのではなく、

1) Robert Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982, p. vi & *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, Fontana Press, 1997, p. xxi; 邦訳、ロバート・ダーントン『革命前夜の地下出版』岩波書店、2000、p. vii および『禁じられたベストセラー』新曜社、2005、p. 14.

2) Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, p. 208; 邦訳、ダーントン『革命前夜の地下出版』p. 269.

3) フランス語のアプロプリアシオン « appropriation » には、これまで訳者によって、さまざまな訳語が与えられてきた。シャルチエのキー概念であるだけに、「我有化」、「撰取 = 利用」、「読者による自己流読み取り」など、訳者によりさまざまな思い入れを込めて訳されてきた。わかりやすく言うならば、読書行為を通して、読者がテキストをどのように読み取り、自分のなかで内面化していくかということである。

フランス革命を導いた君主や王政や旧来の秩序に対する人心の離反は、哲学書の成功の条件として理解されるべきだと言う。そしてシャルチエは、啓蒙思想がフランス革命を導いたという考えに疑問を呈して、フランス革命が啓蒙思想を創り出し、「発明し」、定義づけたと論理を逆転させる⁴⁾。こうしたシャルチエの批判に対してダントンは、「シャルチエは日常的行為・私的行為のレベルを重視しながらも、それがどのように革命的行動へと転化するのかを明らかにしていない」と逆に批判する⁵⁾。

本論は、こうしたフランス革命の起源の問題に注目しながら、「哲学書」であるリベルタン文学がフランス革命に何らかの影響を与えたのか否か、与えたとしたらそれはどのような影響であったのかを考えようとするものである。『禁じられたベストセラー』で、リベルタン文学の『女哲学者テレーズ』(以下『テレーズ』)を取り上げているダントンのなら、おそらくこうした「地下文学」こそ、人心の離反を生みだし、革命を準備したに違いないと言うであろう。それに対してシャルチエなら、こうした問題設定こそ問題で、政治文化の変容こそを問題にすべきだと言うだろうか。われわれが行おうとするのは、フランス革命の起源の問題についての議論を踏まえて、リベルタン文学のなかでも当時よく読まれた『テレーズ』を通して、リベルタン文学のフランス革命への影響を考えようとするものである。『テレーズ』のなかでわれわれがとりわけ注目するのは、さまざまな批判的思想である。聖職者批判、性的モラルの批判、権力システムの批判などさまざまな批判がこの物語から読み取れるが、これらがフランス革命と結びつく要素があるのかどうかを考えてみたい。ただし、その際にわれわれが問題にするのはテキストに内在する世界である。テキストの内部にフランス革命に影響を与える要素があるのかどうかを考えること、それは文学的なアプローチでリベルタン文学とフランス革命の関係を考えることでもあるだろう。まずはやや遠回りになるが、何がフランス革命を引き起こしたのかという歴史学上のフランス革命の起源の問題を整理することから始めたい。問題の所在を把握すること、また革命史研究のなかで起源の問題についてどのような議論が展開されてきたのかを把握しておくことは重要なことだと考えるからである。

II. フランス革命の起源の問題

1) ダニエル・モルネ

フランス革命の起源の問題を考える際に、まず読まなくてはならない本がある。それは、ダニエル・モルネの『フランス革命の知的起源』である⁶⁾。モルネは、本書で、知性が革命の準備にどのような役割を果たしたのかを、膨大な資料を渉猟しながら調査している。そしてたどり着いた結論は、「フランス革命を決定したのは、部分的には、思想で

4) ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳、岩波書店、1990、p. 348.

5) ダントンの『革命前夜の地下出版』、p. 340.

6) Daniel Mornet, *Les Origines intellectuelles de la Révolution française (1715-1787)*, Librairie Armand Colin, 1933; 邦訳、ダニエル・モルネ『フランス革命の知的起源』(上)(下)坂田太郎、山田九朗他訳、勁草書房、1971.

ある⁷⁾』というものだった。モルネは、まずは宗教に敵対する精神、そして不信心の哲学、さらにその後を追うようにして広まった政治的不安に、フランス革命の起源についての流れを読み取っている。しかし、この政治的不安が急速に革命を引き起こすためには、知性が不可欠であり、「知性こそがもろもろの帰結を引き出し組織したのであり、しだいに三部会を要求するようになったのである。そしてその三部会から、もとより知性はそんなことになろうとはつゆ思っていなかったのであるが、革命が勃発することになったのである⁸⁾」と本書を締めくくっている。要するに、啓蒙思想がなければ、フランス革命はこれほど急速には起こらなかったというのがモルネの結論である⁹⁾。

モルネは革命の起源を三つに分けている。一つ目は貧窮と飢餓の革命で、無秩序か血なまぐさい弾圧に終わるもの、二つ目はインテリの大膽な少数派が権力を握り、大衆を引きずり支配するもの、三つ目は見識のあるかなり幅の広い少数派が思想を抱きながら合法的に権力に到達するものである¹⁰⁾。モルネによると、フランス革命は三つ目にあたる。フランス革命の本質的な原因は、人々が物質的に貧窮であったがゆえに、そしてその貧窮という事実を反省したがゆえに、その改革を政治的変革に求めた結果であるという。モルネは本書の目的を、「革命の準備という点において、知性の役割が正確にはどのようなものであったかを追求しようとする¹¹⁾」ことであると述べて、作家の思想が世論にどのような影響を与えたのかを探求しようとする。先ほど、「貧窮という事実を反省したがゆえに」と書いたが、モルネにとって「反省」という語は重要である。というのも、「反省」にこそ、知性の役割が見出せるからだ。したがって、モルネは思想の伝播がどのように行われたかを問題にする。

彼はまた、著作時期を考慮しながら、この伝播の研究を三つの時期に区切って検討している。一つ目は、1715年～1747年で1748年から1750年にかけてモンテスキュー、ビュフォン、ディドロ、ルソーなどの初期作品の出版による区切り、二つ目は1748年～1770年頃で1770年頃は思想の表現活動が完了し（ヴォルテールやドルバックの論争的著作の出版）、思想の一般的な伝播が始まることによる区切り、三つ目は1770年頃から1787年で1788年以降は思想よりも行動が中心となることによる区切りである。

モルネはこうした伝播研究を慎重にしかも誠実に行ったと言える。それは、モルネによるテーヌ批判にしっかりと読み取れる。テーヌを筆頭とするこれまでの研究に対して、「革命以前に、もっともマヤカシであるがゆえにもっとも恐るべき革命的精神が、形成さ

7) *Ibid.*, p. 3; 邦訳、同上書（上）、p. 5。なお、訳文はいちいち断らないが、適宜修正を加えた。

8) *Ibid.*, p. 477; 邦訳、同上書（下）、p. 695。

9) モルネは啓蒙思想の役割について次のように述べている。「大哲学者たちが、未知の国の存在をはじめて知らせたのではない。ただ彼らは、未知の国を遍歴するのに、多くの旅行者がいくつにも分かれていて道に迷う無数の小路の代わりに、その旅をより真っすぐで確実なものにする便利な魅力ある大道を教えたのである」(*ibid.*, p. 476; 邦訳、同上書（下）、p. 694)。

10) *Ibid.*, pp. 1-2; 邦訳、同上書（上）、p. 1。

11) *Ibid.*, p. 2; 邦訳、同上書（上）、p. 2。

れたことになる¹²⁾」と「革命的精神」が虚構であると言って批判し、テヌ自身の言葉を借用しながら、「事実は皆無。あるのはただ抽象的な観念ばかり。自然、理性、人民、暴君、自由についての警句の羅列だけである。ふくらまされて、無益に空中でぶつかり合う風船玉のようなものがあるだけなのである¹³⁾」と痛烈に批判して、最後には「テヌの論証は——そしてまた多かれ少なかれ、革命の知的起源に関するあらゆる研究の論証も——価値あるものとは思えない¹⁴⁾」と一蹴する。確かにモルネの研究姿勢にはコツコツと資料を積み上げていく誠実さがある。また、資料を集めるだけでなく、資料に語らせるという実証的方法は、予断や偏見、誤謬を排除するという点では有効な手段であり、説得力がある。モルネも自覚しているように、こうした方法に基づく研究が彼のあとに続くことによって、あるときはモルネの主張をより強固にし、またあるときは修正するであろう¹⁵⁾。

しかしながら、こうしたモルネの研究に問題がないわけではない。彼が調査によって明らかにしようとしているのは数量に基づく研究であって、数量的研究は指標にはなるが、それによってすべてが説明できるわけではないからだ。シャルチエが批判するのがまさにこの点であり、18世紀の言説がどのようにして受容され、消化吸收され、発信されていったかという中身の問題、いわば質的研究もそれに加えることが必要である¹⁶⁾。また、モルネはフランス革命の知的起源を探求するあまり、知的でない部分には目を向けようとはしない。彼はダルジャンスについて、章を割いてまで言及しているが、本論で取り扱う、ダルジャンスの作品と思われる『テレーズ』には決して触れない。作品名を挙げているだけである¹⁷⁾。哲学書の伝播には最大限の注意が払われているが、現在ではリベルタン文学と位置づけられる非道徳的な猥褻作品は、モルネの研究からは抜け落ちている。しかし、当時はこうした猥褻な地下文書は「哲学書」に分類されていたことを考えれば、その伝播はフランス革命の知的起源に含めるべきだったのではないか。こうした批判から、フランス革命の起源を考えたのがダーントンである。

2) ロバート・ダーントン

ダーントンはモルネがフランス革命の知的起源の出発点とした「フランス人は18世紀に何を読んでいたか」という問いを引き継ぎながらも、モルネが調査対象から除外した非合法文学に注目する。モルネは知的起源を探求するあまり、知的でないと思われるリベルタン文学には目を向けようとはしなかったが、ダーントンは「18世紀のフランスの読者に

12) *Ibid.*, p. 469; 邦訳、同上書（下）、p. 684.

13) *Ibid.*, p. 470; 邦訳、同上書（下）、p. 684.

14) *Ibid.*, p. 470; 邦訳、同上書（下）、p. 685.

15) *Ibid.*, p. 3; 邦訳、同上書（上）、p. 4.

16) Roger Chartier, *Les origines culturelles de la Révolution française*, Editions du Seuil, 1990, p. 35; 邦訳、シャルチエ、前掲書、p. 29.

17) Mornet, *op. cit.*, p. 120 et p. 132; 邦訳、前掲書（上）、p. 171および p. 190.

とって、非合法文学こそ実際上の現代文学だった¹⁸⁾」と述べて、調査対象を非合法文学に限定している。その資料体はスイスのヌシャートル市図書館が所蔵するヌシャートル印刷協会に遺された古文書の山である。ヌシャートル印刷協会は、1769年から1789年まで20年間、フランス王国内に偽版や禁書を密輸ルートにのせて送り込むための印刷工房であった¹⁹⁾。ダーントンは、この間の営業活動にわたる資料と出会い、それを読み解くことで、18世紀のフランス人が何を読んでいたのかを明らかにしようとした。彼はこの研究の意義を4つ挙げている。一つ目は、書物の歴史を考えることで、文学を文化システムの一部として研究できるということ。忘れられたベストセラーの詳細な分析によって、「テキストの研究がいかに専門分野としての書物の歴史の核心に位置するのかを示したい」と述べて、テキスト分析の重要性を指摘する。二つ目は、「書物の歴史がどのようにコミュニケーション史というより広大な分野に通じているか」を示そうとすることである。文学をコミュニケーションのシステムとしてのみ理解することに疑問がないわけではないが、書物以外の媒体と影響を与え合いながら、アンシアン・レジームの安定性を脅かしたのではないかという仮説は理解できる。三つ目は、イデオロギーと世論の形成とのつながりである。禁書は世論に関する情報を多く含んでいると禁書調査の重要性を指摘している。そして四つ目は、政治史とフランス革命の起源である。禁書には政治的な狙いと政治一般についての見解が含まれており、また禁書は現実そのものに形を与え、出来事の成り行きを決定する助けとなったと、禁書調査の意義を強調している²⁰⁾。

このようなダーントンの研究に対して、シャルチエはいくつかの疑問を提起している。たとえば注文書において告発文学の比重が増していることが、1780年代における人々の精神の急進化を表すものと言えるのか、「高尚な啓蒙思想」と「どん底の文芸（ダーントンの言葉では「どぶ川のルソー）」との対置は意味がなく、禁じられているという点では同じ読まれ方をされているのではないか、形式や主題の融通無碍な往来があったために、「哲学書」カタログにある書物を同一視するようになったのではないか、禁じられた書物を革命勃発の火種とみなしていいのだろうか、などなどである²¹⁾。とりわけ「禁じられた書物を革命勃発の火種」とみなす起源の問題について、告発文が大量に流布したことによって王政の表象を非神聖化し、革命的亀裂の温床となった真の「イデオロギーの浸食作用」を生み出したという考えに、シャルチエは批判を加える。そして彼の結論は、「無礼きわまるパンフレット文学の大量の流布と、王政のイメージの崩壊とのあいだに關係が

18) Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, p. xix; 邦訳、『禁じられたベストセラー』、p. 12.

19) Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, p. xxi; 邦訳、p. 14および *The Literary underground of the Old Regime*, p. 6; 邦訳、『革命前夜の地下出版』、pp. vi-vii et pp. 333-334を参照。

20) Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, pp. xxi-xxiii; 邦訳、『禁じられたベストセラー』、pp. 15-17を参照。

21) Voir Chartier, *op. cit.*, chap. IV; 邦訳、シャルチエ、前掲書、第4章を参照。

あったにしても、それはおそらく、直接的なものでも必然的なものでもなかった²²⁾」というものだ。では、ダーントンを批判するシャルチエは、フランス革命の起源をどのように考えているのだろうか。

3) ロジェ・シャルチエ

シャルチエは「フランス革命を決定したのは、部分的には、思想である」という啓蒙書を重視するモルネの考えと、「禁じられた書物を革命勃発の火種」とみなすダーントンの考えに対して、どちらの考えにも批判的である。彼は王や王政から人心が離れたことを「哲学的著作」の文句なしの成功結果だと考えるのは危険な発想であるとまで言っている。彼の論拠は、君主からの人心離反は知的営為の結果とは限らず、さまざまな日常の実践、無意識に行われる身振り、決まり文句となった言葉などの直接的なものを通じて、始まったこともありえるというもので、また人心離反がすでに完成していたから「哲学書」が受け入れられたというものである。また、テキストの読みは多様であって、「哲学書」の読みが一元的ではない多様な理解を生み出すというものだ。そこから、フランス革命こそが啓蒙思想を、そして問題の書物を創り出し、その逆ではないという考えに至る。彼が重要視するのは、「哲学書」の秩序転覆的な内容ではなく、むしろ、全く新しい読書の仕方である²³⁾。

シャルチエはまた、超越性を完全に失った王権に対する関係を変容させる象徴的・感情的離脱は、「哲学書」によって引き起こされたのではなく、王政の始原神話の浸食、王のシンボルの非神聖視、王の身体に対してとられる距離は、「すでに存在する」一群の表象をなしているのであって、これらの表象のゆえに、1770年代と1780年代の秩序破壊的な文学の徹底的な告発が受け入れられる状態にあったことを、翻訳の際に付け加えられた「あとがき」のなかでも強調している²⁴⁾。

こうした問題は、簡単にまとめると、フランス革命は「哲学書」の結果か条件かの問題になる。しかしながら、結果か条件かはそれほど重要な問題だろうか。「哲学書」がフランス革命を直接的に引き起こしたのではないにしても、完全に否定する論拠を提示することはなかなか難しいのではないか。1770年代と1780年代に「哲学書」を受け入れる条件が整っていたことはなぜなのか？この変化を説明する必要があるが、それは啓蒙思想が先か、革命が先かという迷路に迷い込むだけのように思われる。

シャルチエは先に述べたテキストをどのように内面化するかというアプロプリアシオンを重視するが、ダーントンもその重要性は認めたくえて、当時の文化の枠組みによって規定されるテキストの読み方があると考えている。確かに、読書行為は個人的なものであり

22) *Ibid.*, p. 121; 邦訳、同上書、p. 125.

23) このあたりのシャルチエの論理は、*ibid.*, chap. IV; 邦訳、同上書、第4章を参照。

24) 邦訳、同上書、p. 353.

その読みは多様であるが、われわれの読みが今、この文化に規定されるように、18世紀の読みも当時の文化に規定されると考えるのは当然のことである。

ではシャルチエは、フランス革命の起源の問題をどのように考えているのだろうか？彼はまず「起源」の探求は幻想だと言う。「雑多でばらばらな一群の事実や観念を、ある出来事の「原因」や「起源」だと主張することが正当なのであろうか²⁵⁾」と疑問を提起し、無関係で異質で非連続な思想や行動を統一するために「起源」を見出していると批判する。こうしたシャルチエの考えの背景にあるのは、フーコーの起源の概念についての批判である。つまり、歴史の流れは線状であると考え、いつまでも終わることのない始原の探求を正当化することは、全体性、連続性、因果性という古典的な概念に取りつかれた分析へのフーコーの批判を継承している。確かにシャルチエが言うように、「歴史学の伝統は、特異な出来事を、理想的な連続性のなかに解消しようとするが、〈現実の〉歴史は、出来事を、そのもっとも独自で鋭い形で再現する²⁶⁾」ことであるだろう。それは、歴史学が出来事をまとめたり、流れを読み取ったり、原因を見出すことに意味があるのではなく、あるがまま再現することに意味を見出すとシャルチエが考えていることに由来する。それゆえにモルネの『フランス革命の知的起源』というタイトルは、シャルチエによって『フランス革命の文化的起源』に本のタイトルが変更されることになる。このタイトルの命名が、いかにシャルチエがモルネを意識しているかをよく物語っている。ではこの変更の意図はどこにあるのだろうか？

シャルチエはこの変更の意図を、実践は、それを基礎づけたり、正当化する言説から演繹されるという考えと、社会的な作動のあり方の潜在的な意味は、明示的なイデオロギーの用語で翻訳することが可能であるという二つの考えに疑問を投げかけるためであると説明している²⁷⁾。つまり、思想（言説）が行為（実践）を生み出すという考えとその行為を何らかのイデオロギーで説明することに異議を唱え、言説（競合的な言説）と実践（非連続的な実践）の不調和のなかに見出すべきだという。それが、「文化的起源」への移行の意図というわけだ。シャルチエの論理はなかなかわかりにくいだが、彼が問題にしようとするのは、歴史の動き、運動である。しかしながら、啓蒙思想が無垢な人間を闘う人間に変え、こうした人がしだいに増えたことによって革命が生まれたというような動きではない。彼が目するの、多様な啓蒙思想がどのように受容されるのか（アプロプリアション）、そしてその受容が実践を生み出すダイナミックな運動なのである。

さて本論では、こうしたフランス革命の起源の問題、とりわけフランス革命と啓蒙思想の関係の問題を踏まえながら、それではフランス革命とリベルタン文学との関係はどうかを考えてみたい。その前に、われわれはなぜ『テレーズ』を取り上げるのか、またこ

25) Chartier, *op. cit.*, p. 15; 邦訳、同上書、p. 7.

26) *Ibid.*, p. 16; 邦訳、p. 8.

27) *Ibid.*, p. 34; 邦訳、pp. 27-28.

の作品にどのようにアプローチするのかについて見ておきたい。

Ⅲ. リベルタン文学の核心としての『女哲学者テレーズ』

1) なぜ『女哲学者テレーズ』なのか

リベルタン文学といってもその範囲は広く、多様である。クレビヨン・フィスの性を暗示的に、繊細に描いた作品もあれば、『女哲学者テレーズ』や『カルトゥジオ会修道院の門番である Dom B*** の物語』のように性を露骨に描くことによって聖職者を批判する作品、あるいはルイ15世、デュ・バリ夫人、マリー・アントワネットの放埒な私生活を描き出した政治的作品など、いわば雑多な寄せ集めと言える²⁸⁾。しかし、リベルタン文学として一つに括れる共通点がある。その共通点とは、「逸脱」と「反逆」である。リベルタン文学に共通しているのは、既存秩序である当時のキリスト教モラルから逸脱した、非道徳的で反逆的要素を含む点であり、しかもこうしたキリスト教モラルからの逸脱は、性を通して語られる²⁹⁾。ではこうした多様なリベルタン文学のなかで、『テレーズ』を取り上げてフランス革命との関係を問題にする意味はどこにあるのだろうか？とりわけ一つの作品を取り上げて革命との関係を探ろうとすることに、違和感をもたれる読者もおられることだろう。ただ、その理由は単純明快である。それは、革命前の20年間によく読まれた作品であるからだ。もちろんダーントンのベストセラーリストのなかには、『テレーズ』以外の作品も含まれている。しかし、ダーントンも『禁じられたベストセラー』で「哲学的ポルノグラフィ」³⁰⁾として『テレーズ』を取り上げているように、この作品は性と哲学が描き込まれた物語であって、サドを含む後世への影響という点からも、海賊版を含めて何度も再版されたという点からも、またエロティックなさまざまな挿絵が挿入されてテキスト以外の関心によって読者を惹きつけたと考えられる点からも、リベルタン文学の中核に位置していると言える。では、この物語をどのようにフランス革命と関連づけようとするのか、まずはわれわれの視点を明らかにしておくことから始めたいと思う。

2) アプローチの方法

最初に18世紀の「仮想の読者」を考えたいと思う。この「仮想の読者」が『テレーズ』をどのように読んだのかを考えてみたいのである。しかしながら、何らの条件もなく仮想をすることは意味がない。「仮想の読者」の条件は、この作品の読者が生み出す「暗黙の作者」が想像する「暗黙の読者」である。われわれはテキストを読むときに、テキストの背後に「暗黙の作者」を意識している。それはわれわれが創り出す作者であって、「現実

28) リベルタン文学というジャンルをどのように考えるかは今なお議論が尽きない問題である。ここで挙げた「政治的作品」などは意見が分かれるところだろう。詳細は以下を参照。Du genre libertin au XVIIIe siècle, Editions Desjonquères, 2004.

29) 「リベルタン」という語源および意味の変遷については、拙訳『閨房哲学』人文書院、2014年の「訳者解説」を参照のこと。

の作者」ではない。作者もまた、テキストを生み出すときには「暗黙の読者」を考えているのであって、それは「現実の読者」ではない。こうした視点に立って、『テレーズ』の「暗黙の作者」が考える「暗黙の読者」を考えようというわけだ³⁰⁾。それは不可能な試みだと思われるかもしれない。テキストを読み進む読者が「暗黙の作者」を思い描くことは可能であっても、「暗黙の作者」が思い描く「暗黙の読者」は想像でしかないからだ。しかし、この想像の読者を、ここでは「仮想の読者」と呼ぶことにして、この「仮想の読者」がどのような読みをしたのかを考えてみたいと思う。

「現実の作者」が物語を創るときに、「暗黙の読者」を想像せずに物語を考えることはまずありえないと言ってもいいだろう。「現実の作者」自らの快樂のために物語が創られることも想像できなくはないが、物語は、一般的に、読まれることを前提にしていると考えられるからだ。読まれることを意識するということは、「現実の作者」は読書の背後にいる「暗黙の読者」を意識せざるをえない。とりわけ「逸脱」と「反逆」の書であるリベルタン文学は、読者を意識し、読者へのメッセージを意識して書かれた可能性が高い。というのも、読者を共犯者に誘惑しようとする作品が多くみられるからだ。では、「暗黙の作者」が意識する「暗黙の読者」、つまり「仮想の読者」の読みはどのようにして読み取れるのだろうか？読み取ることが本当に可能なのであろうか？

まさにそれが、「暗黙の作者」が「暗黙の読者」を意識して創り出すテキストそのもののなかに読み取れるのではないか。「暗黙の読者」を意識すればするほど、物語の構成は熟慮され、テキストは精緻な言葉で練り上げられていく。われわれが目指するのはこの点である。『テレーズ』は、ヌシャール印刷協会が活動していた1770年代と80年代によく読まれたことがわかっているが、そこには読ませる何かがあったはずである。「暗黙の作者」が成功したこの読ませる何かこそ、「仮想の読者」が読書に切望するものだったのである。それは、読者が何を面白いと思うか、何に関心をもつか、さらに言えば何を内面化したかを考えることである。ただし「仮想の読者」とはあくまで想像のなかでの仮定であり、実証できるものではない。とりわけ18世紀の読者を仮想することは難しい。しかしながら、読者が内面化したであろうことのいくつかを明らかにできれば、こうした読書がフランス革命に何らかの影響を与えたのかどうかも判断できるのではないか。われわれは1789年にフランス革命が勃発した歴史的事実を知っているが、1748年に出版され、18世紀後半によく読まれた『テレーズ』のテキストをまずは革命と切り離して読んでみたい。こうしたアプローチがどのような結論を導き出すかわからないが、われわれの分析がリベルタン文学とフランス革命の結びつきを考えるうえで一つの方法になればと思う。

30) 「暗黙の読者 implied reader」、「暗黙の作者 implied author」という表現は、「現実の読者 real reader」、「現実の作者 real author」と明確な区別を主張したウェイン・C・ブースの考え方に基づいている (Cf. Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, The University of Chicago Press, First Edition, 1961)。したがって、ここでは「現実の作者」がダルジャンスであるか否かは問題にならない。「仮想の読者」は関谷が創り出した概念である。

IV. 『女哲学者テレーズ』の読み

1) 読者層

ではいったいどのような人々が『テレーズ』を読んでいたのだろうか？はっきりしているのは、字が読める人である。シャルチエによると、識字率は1686年～1690年で男性29%、女性は14%。1786年～1790年では男性47%、女性27%に増加している³¹⁾。また別の資料では、結婚文書に署名できる者は、17世紀末には全国で21%であったが、革命前に37%（男性47%、女性27%）に増加している。また、パリの遺産目録では男性66%、女性62%で全国平均を大きく上回っている³²⁾。こうした資料からは、17世紀末ではおよそ20%であった識字率が、革命前には37%にまで増加していること、また都市部では農村よりもはるかに識字率が高いことがわかる。ではどのような社会的階層がリベルタン文学の読者層なのであろうか。リベルタン文学の読者層を特定することは難しい。しかしながら、禁書のみを購入する読者はまずいないだろう。したがって柴田三千雄が述べているように、「禁書を含めて書物や雑誌の購読者は、都市の貴族・聖職者と上層・中流ブルジョアが大半を占めていた³³⁾」というのは間違いがないだろう。柴田はまた、活字文化とのかかわり方によって、社会的階層を4つに分類している³⁴⁾。

1. 読み書きのできない都市と農村の民衆
2. 都市の小ブルジョア、農村の中富農など読み書きのできる多様な社会集団
3. 都市の上層・中流ブルジョア
4. 中高等教育を受けた知識人層

「都市の貴族・聖職者と上層・中流ブルジョア」がリベルタン文学の大半の購読者であるにしても、4の「中高等教育を受けた知識人層」および2の「都市の小ブルジョア、農村の中富農など読み書きのできる多様な社会集団」もまたその一部は読者層に入るだろう。字の読めない者を読者から排除したが、『テレーズ』の多くの版には挿絵が挿入されており、字は読めなくても挿絵から物語内容を想像した読者もいただろう。とくに18世紀後半になるにつれて、識字率向上とともに2の「都市の小ブルジョア、農村の中富農など読み書きのできる多様な社会集団」が新たな読者として増加したのではないかと考えられる。また、読書意欲という観点からは、社会的上昇を狙う都市の小ブルジョアがさまざまな情報や知識を求めて読書に打ち込んだとも考えられる。

では『テレーズ』にはどのような階層の人物たちが登場するのだろうか？これらの登場人物のなかに、読者層を見出す手掛かりはないだろうか？主人公のテレーズは地方の町で生まれ、父は小金持ちの商人、母は貴族の愛人から金をもらっていたが、わずかな収入で

31) Chartier, *op. cit.*, p. 101; 邦訳、前掲書、p. 104.

32) 柴田三千雄著『フランス革命はなぜおこったか』山川出版社、2012、p. 76.

33) *Ibid.*, p. 77.

34) *Ibid.*, pp. 78-79.

暮らしている。テレーズの友人であるエラディス嬢も同じ町で生まれた商人の娘である。彼女を誑かすディラグ神父は聖職者、C夫人は貴族として生まれ、T神父は聖職者。パリで知り合ったボワ＝ロリエは高級娼婦、彼女の叔父のB氏とその友人のR氏は徴税請負人。ボワ＝ロリエの育ての親であるルフォールはパリに住むブルジョア。ボワ＝ロリエの保護者は高等法院院長。彼女の初物を奪おうとする男たちはソルボンヌの神学者、聖職者、軍人、司法官、徴税請負人。ボワ＝ロリエが知り合った人物たちとは男爵夫人、その妹ミネット、ミネットの恋人、高位聖職者、大金持ちの貴族、医者、宮廷人、カプチン会修道士たち。そしてテレーズの愛人の伯爵。これ以外にも身分が明かされない登場人物もいるが、主人公のテレーズ一家と友人のエラディス嬢、身元がわからないボワ＝ロリエを除いて、ほぼすべてが貴族、聖職者、ブルジョアで当時の上流階級である。ではこれらの情報から何がわかるのだろうか？『テレーズ』の作者は正確に言うと不詳だが、ダルジャンス侯爵の可能性が高い。作者が貴族であれば、彼が生きる世界は上流階級で、登場人物がそれを取り巻く人々になることは当然のことである。しかし、読者はどうだろうか？その中心は「都市の貴族・聖職者と上層・中層ブルジョア」であるにしても、1748年の出版以降革命までの40年間に、読者層の幅はしだいに拡大していったことが考えられる。その新たな読者層と考えられるのが、上でも述べた都市の小ブルジョアではないだろうか。では、「暗黙の作者」は読者にどのようなテーマを描こうとしたのだろうか？『テレーズ』を書くことによって、読者に何を讀んでもらいたかったのだろうか？

2) 「暗黙の作者」が示す主題

「暗黙の作者」はテキストのなかに思わず自分の描きたいテーマを漏らしてしまうことがある。たとえば次のような箇所はそう考えられないだろうか。無垢なテレーズにC夫人とT神父が語る主題に注目してもらいたい。ここでは「暗黙の作者」＝C夫人とT神父であって、テレーズ＝「暗黙の読者」を教化したい主題が明示されている。

私たちは一ヵ月後に出発することが決まりました。それまでの期間が、町から一里ほど離れたC夫人の田舎家で彼女と過ごせる期間でした。T神父は、時間が許す限り、そこに毎日決まってやってきて泊まりました。二人は私にたえず好意を示しました。彼らはもはや私の前で慎みのない話をすることや、私が受けた教えとは非常に異なる趣味で道徳、宗教、形而上学上の主題について話すことを気にしてはいませんでした。私は、C夫人が私の考え方や論理の立て方に満足し、私を明晰で明白な証拠へと論理的に導くことに快感を得ていることに気づいていました。ごくたまに、T神父がいくつかの主題に関して、自分の考えをあまりに強く押し進めないようにC夫人に合図を送るのに気づいて、悲しくなることがありました。こうしたことに気づくと、私は侮辱された気になりました。私は、二人

が私に隠そうとしていることを教えてもらうために、何でもしようとして心に決めました³⁵⁾。

テレーズに教えたい「道徳、宗教、形而上学上の主題」は、この後 T 神父が詳説することになるが、まさにこの主題こそ「暗黙の作者」が「暗黙の読者」にもっとも伝えたい、書きたいことだったのではないか。テレーズ = 読者の理解が及ばないことを想定しながらも、聞かせたい内容であることは間違いない。あるいはまた別の箇所では、ボワ = ロリエ夫人がテレーズの話聞いた後で、彼女が何に驚いたかが次のように述べられている。

こうした話を詳しく聞いて、彼女 [ボワ = ロリエ夫人] は話しぶりを変えました。私 [テレーズ] は礼儀や世間のしきたりについてあまり知らないと彼女に思われていただけに、道徳や哲学的省察や宗教における私の知識に彼女はすっかり驚きました。ボワ = ロリエは寛大な心をもっていました³⁶⁾。

ここでも「道徳や哲学的省察や宗教」についてのテレーズの知識が、ボワ = ロリエ夫人を驚かせる。ボワ = ロリエが、関心を惹くテーマがこの三つであり、それはまた「暗黙の作者」が「暗黙の読者」を教化したい主題なのだ。もちろん、こうした意図が読者に伝わるか否かは別の問題である。シャルチエが問題にするのはまさにその点であり、読者はテキストによって簡単に色を塗り替えられるわけではない。ではこれらのテーマは『テレーズ』でどのように述べられているのだろうか。

3) 道徳、宗教、哲学

道徳で問題になるのは、キリスト教が説く「性的モラル」についての批判である。T 神父はテレーズにオナニーが決して罪ではないことを説く。自然の法則は神が創ったものだから、神が創った方法で欲求を軽減することは神の侮辱にはならないと T 神父は説明する。オナニーは自然の法則だというわけだ³⁷⁾。T 神父と C 夫人はセックスを繰り返すが、決して生殖につながる行為は行わない。T 神父は、性的欲望を満たすにあたり、女性は三つのことに気をつけさえすればいいという。それが、悪魔に対する恐れ、評判、そして妊娠だ。とりわけ妊娠を避けること、秘密を守り、節度をもって振る舞うことで、性的快楽は罪にはならないと T 神父は述べている。

宗教が問題になるのも T 神父と C 夫人の対話の箇所である。T 神父は万物の創造主である神を認めるが、宗教は人間が作り出したものとして批判する。とくにキリスト教に対

35) *Thérèse philosophe*, par Florence Lotterie, Flammarion, 2007, pp. 116-117; 邦訳、拙訳『女哲学者テレーズ』人文書院、2010、p. 66. 強調は関谷。

36) *Ibid.*, p. 150; 邦訳、pp. 112-113. 強調は関谷。

37) *Ibid.*, p. 113; 邦訳、p. 62.

してはその批判は激烈である。「完全なキリスト教徒になるためには、無知になり、盲目的に信じ、あらゆる快樂や名誉や富を棄て、両親や友人を見捨て、処女性を守り、一言で言えば自然に反するあらゆることを行わなければなりません。しかしながら、この自然が確実に働くのは神の意志によってなのです。宗教は、これほど正当で善良な存在のなかに、なんとという矛盾を思い描くのでしょうか！³⁸⁾」と T 神父は述べている。

哲学というテーマで繰り返し言及されるのは、決定論的、機械論的な考えである。人は神によって理性を与えられたけれど、それは自由な意志決定を行わせるためではない。テレーズは「この意志やいわゆる自由は、力というものをもっておらず、私たちに誘惑する情念や欲求の力の大きさに従ってしか働かない³⁹⁾」と述べて、死にたいという欲求よりも生きたいという欲求が、天秤が重い方に傾くように上回れば自殺をすることは無いというものだ。テレーズが描く自分の肉体も、「機械の調子を狂わせました⁴⁰⁾」、「あらゆる機械が不調になり⁴¹⁾」、「機械全体が混乱に陥っていた⁴²⁾」などと「機械」に見立てられている。では、こうした「暗黙の作者」が示す主題を「仮想の読者」はどのように読み取ったと考えられるだろうか。

4) 「仮想の読者」の関心

われわれは「仮想の読者」の関心は、「暗黙の作者」がテキストに漏らす主題に見られるのではないかと考えて、その主題が「道徳、宗教、哲学」にあると考えてきた。先にも述べたように、読者個人の読みは多様であるけれど、「読みは文化に規定される」とも言える。したがって、18世紀の当時の文化に規定された読者＝「仮想の読者」が、『テレーズ』から読み取ったものの大きな枠組みは取り出せる。その枠組みが、「道徳、宗教、哲学」にあると考えられるのである。

では18世紀の読者は『テレーズ』をどのように読んだのだろうか？何が面白くてよく読まれたのだろうか？「道徳、宗教、哲学」の枠組みのなかで、もっとも幅広い関心を集めるのは、性についての記述であろう。禁書のなかでも猥褻本は厳しい取り締まりの対象であった。リベルタン文学の多くが、キリスト教の説く禁欲的で生殖のための性的モラルからの逸脱を描写しているが、読者にとって、性は公にできない秘められた領域である。『テレーズ』も、「片手で読む本」の役割を果たしたかもしれないし、読者の覗き見趣味を利用して性的欲望を掻き立てることに成功したに違いない。こうした役割から、『テレーズ』はポルノグラフィイと言えるかもしれない。しかし、われわれが現在目にするポルノはひたすら読者の性的欲望を掻き立てることを目指しているのに対して、『テレーズ』は

38) *Ibid.*, p. 138; 邦訳, p. 95.

39) *Ibid.*, p. 83; 邦訳, p. 22.

40) *Ibid.*, p. 83; 邦訳, p. 21.

41) *Ibid.*, p. 86; 邦訳, p. 27.

42) *Ibid.*, p. 87; 邦訳, p. 27.

性的欲望を掻き立てることだけが目的ではないことは明らかだ。その理由は、性的描写以外に宗教や哲学についても語られているからだ。本来、ポルノには宗教や哲学についての議論は余計なものである。したがって、現在の視点によって、『テレーズ』を18世紀のポルノグラフィとみなすことは間違っている。あくまでも18世紀に流行したりベルタン文学の一つとして位置づけるべきである⁴³⁾。

「仮想の読者」は、宗教についての記述にも興味を惹きつけられたことだろう。それは、T神父がC夫人に話し、テレーズが盗み聞くという設定になっている第一部の後半部である。T神父は「存在するものすべての創造者であり、原動力であるたった一つの神がいること、このことについては疑いをはさむ余地はありません⁴⁴⁾」と述べて、神の存在は疑わない。しかし、彼は宗教を問題にする。「宗教はまず恐れによって創られました。雷、嵐、風、雹^{ひょう}が、地球の表面に広く住み着いた原初の人間の食べ物となる果物や穀物を襲いました。こうした天災を避けるために無力であった人間は、より強いと認めるものに対して、また自分たちを苦しめるために創られたと信じるものに対しては、祈りに頼らざるをえません⁴⁵⁾」と述べて宗教の起源を説明する。また、宗教がどのようにして生まれたのかについて、「さまざまな時代にさまざまな地方で生まれた野心的な人々や多くの天才や有力な政治家たちは、民衆の信頼を利用し、しばしば奇妙で空想的で暴君的な神々を予告し、宗教を創り、彼らが長や立法者になれるさまざまな団体を作ろうとした⁴⁶⁾」と述べて、宗教と政治の結びつきを指摘する⁴⁷⁾。それに対してC夫人は、こうした宗教についての考察は友人や同胞の幸福を生み出すのに、なぜ公にしないのかと問い詰める。T神父の結論は、情念に支配されず、自分の頭で考えられる人は10万人のうち4人いればいいところであり、大多数が抱く不安や希望にとって、宗教は必要というわけである。

こうした宗教的な議論から、「仮想の読者」は何を読み取り、内面化しただろうか。その答えはなかなか難しい。「哲学書」に慣れ親しんできた読者は別にして、初めてこうした考えに触れた読者は、ボワ＝ロリエ夫人がテレーズの話聞いて驚いたように、すっかり驚き、価値が転覆したかもしれない。なかには、10万人のうち4人に自分が入り込んだと考えて、T神父の考えを密かに金科玉条とする読者もいたかもしれない。

それは哲学的記述についても同様である。伯爵は物語の終わりでテレーズに哲学を説く。T神父の決定論的、機械論的な考えを引き継ぎながら、伯爵は精神について、「〔精神が〕どこかに存在するとすれば、それは一つの場所を占めていなければならない。一つ

43) ダントンは、ポルノの概念が生まれたのは19世紀であることを断ったうえで「猥褻本」にポルノグラフィという分類名を与えているが、18世紀にはなかった概念を使うのではなく、リベルタン文学と言うべきである(Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, pp. 87-88; 邦訳、p. 128を参照)。

44) *Thérèse philosophe*, p. 139; 邦訳、p. 97.

45) *Ibid.*, p. 138; 邦訳、pp. 96-97.

46) *Ibid.*, pp. 138-139; 邦訳、p. 97.

47) 現在の『テレーズ』研究では、こうした記述の多くが、デュマルセ(César Chesneau Du Marsais)の『宗教の検討あるいは誠実な説明が求められる宗教についての疑問』(*Examen de la religion ou Doutes sur la religion dont on cherche l'éclaircissement de bonne foi*)に由来していることがわかっている。

の場所を占めているとすれば、それは広がりをもっている。広がりをもっているなら、部分がある。部分があれば、それは物質です。したがって、精神は幻想であるか、物質の一部なのです⁴⁸⁾」と述べて、唯物論的な考えを明らかにする。こうした考えを前にして、読者は何を読み取ったのだろうか。T 神父の考えを伯爵は引き継いでいることから、物語内では聖職者と貴族はすでに同じ考えを共有していることがわかる。「暗黙の作者」は登場人物の糸を引っ張ることができる位置にいることを理解したうえで、それでも1748年という時点で、聖職者と貴族の一部はT 神父や伯爵の哲学を自分のものとしていたと考えられるのではないか。つまり、彼らは読書によって価値が転覆するような読者ではないと考えられる。『テレーズ』からもっとも大きな影響を受けた読者は、おそらくテレーズやボワ＝ロリエ夫人のような人たち、言い換えると読者層のところで指摘した「都市の小ブルジョア」ではないかと考えられるのである。

『テレーズ』は、読者を増やすにつれて、「道徳、宗教、哲学」について述べられている考えを拡散していったことだろう。では、それはフランス革命に影響を与えたとはたして言えるのだろうか？

V. おわりに

われわれはリベルタン文学がフランス革命に何らかの影響を与えたのかどうかを、代表的作品である『女哲学者テレーズ』を通して考えてきた。その直接的影響を証明することは残念ながら難しい。しかし、直接的な影響は証明できないにしても、「仮想の読者」の読みを通して、間接的な影響については述べることができるだろう。そのもっとも大きな影響はおそらく宗教に関するものだ。読者一人ひとりの内面化の過程を明らかにするのは不可能にしても、「仮想の読者」の意識変革に大きなインパクトを与えたのは、宗教的な議論ではないかと思われるからだ。神父が語る教権批判は、神父の立場からすれば逆説的だが、論理的で、真実味がある⁴⁹⁾。それは、フランス革命の進行とともに教権、聖職者、キリスト教が批判される歩みと重なる。

とりわけキリスト教が説く性的快楽の禁止について、『テレーズ』のインパクトは大きかったのではないか。性行為は生殖のためのものではなく、快楽を求める行為は罪ではないという考えは、読者に受け入れられやすい考えである。ここでは、リベルタン文学の特徴である「逸脱」と「反逆」が「性」を通して語られているが、「性」は誰にでもかかわることであるし、隠すべきものであるだけにそれだけますます読者の欲望を掻き立てる。それゆえ「性と哲学」が一体となった『テレーズ』は、物語として読者の内面に入り込みやすい形式であるだろう。

48) *Thérèse philosophe*, pp. 191-192; 邦訳、p. 163.

49) 18世紀に生きた啓蒙思想の先駆者であるピエール・パウル・バールや無神論にたどり着いたジャン・メリエも聖職者であった。

また、「性」は今、ここでの現実的快楽を生みだし、キリスト教が説くあの世の幸福を疑問に付す⁵⁰⁾。というのも、性的快楽は今、ここで実感できる幸福であって、あの世の観念的な幸福とは異なり、あの世からこの世へと読者の視点を移動させる力をもっているからだ。フランス革命が問題にしたのが、まさに当時の今、この社会的現実であって、こうした視点の移動に『テレーズ』を含みリベルタン文学が寄与したのではないかと考えられるのである。『テレーズ』がどれほど寄与したのかを正確に推し量ることは難しいが、読者の少なくともいくらかには、「暗黙の作者」のメッセージが届き、自分の考えとしたものがいたと思われる。よく読まれたということはその数の増大を明かしているのではないだろうか。

識字率の増大に伴って読者層も拡大していったが、それがもっとも顕著なのは、「都市の小ブルジョア」だと考えられる。『テレーズ』では、無垢で純粋なテレーズが啓蒙されていく過程が描かれている。こうした意味では、「暗黙の作者」が啓蒙しようとしていたのはテレーズのような人物で、それが「仮想の読者」と言えるだろう。もっとも知的好奇心が旺盛で、キリスト教の教えに疑問を抱き始めた人々、読書を好み、個人を意識し始めた人々、社会的上昇志向はあるが、社会の制度にも漠然とした懐疑をもち始めた人々、こうした人々こそ『テレーズ』を読んで批判精神を受容し、それを内面化した人々ではないだろうか。

『テレーズ』を通してリベルタン文学がフランス革命にどのような影響を与えたのかを考えてきたが、われわれが導き出した結論は、少なくとも間接的影響はあったのではないかという消極的なものである。しかし、この問題は影響があったか否かで片付けるような問題ではなく、その論証の過程にこそ意味があるだろう。『テレーズ』を読んだからといって読者が革命に突き進むわけではない。しかしながら、読書による内面化は、変化を望み、変化を受け入れる役割を果たしたのではないか。したがって、「逸脱」と「反逆」の書であるリベルタン文学は、革命を準備する批判精神を、読者の心の片隅に生みだすことに寄与したのではないかと考えられるのである。

【付記】 本論は「18世紀フランスのリベルタン文学と版画がフランス革命に果たした役割についての研究」（基盤研究（C）、課題番号：15K02397）を研究課題として、日本学術振興会科研費平成27-30年度の助成を受けた研究に基づくものである。

50) リベルタン文学における性の役割については以下も参照のこと。拙訳『女哲学者テレーズ』の「訳者解説」および拙訳『閨房哲学』の「訳者解説」。

La littérature libertine et la Révolution française

— A travers *Thérèse philosophe* —

Kazuhiko SEKITANI

La littérature libertine au XVIII^e siècle a-t-elle été un des facteurs qui a préparé la Révolution française ? A-t-elle exercé quelque influence sur la Révolution française ? Si c'est le cas, quelle a été cette influence ? Il est difficile de répondre à ces questions, car justement la place qu'occupait la littérature libertine dans la société française est mal connue. Cet article se donne donc pour but de réfléchir sur le rôle de la littérature libertine au XVIII^e siècle et aussi sur les relations qu'ont pu avoir la littérature libertine et la Révolution française.

Nous commencerons cette réflexion en faisant un rapide rappel de quelques discussions sur l'origine de la Révolution française entre des historiens importants comme Mornet, Darnton et Chartier. Mornet arrive à la conclusion que « ce sont, pour une part, les idées qui ont déterminé la Révolution française ». Darnton, en traitant la littérature clandestine, a tiré la conclusion que « In their own language, the *livres philosophiques* called for undermining and overthrowing. The counterculture called for a cultural revolution — and was ready to answer the call of 1789 ». Chartier, de son côté, critique l'idée selon laquelle la philosophie des Lumières aurait été un agent déterminant dans le mouvement qui a conduit à la Révolution. Il inverse même l'idée : C'est la Révolution qui invente cette image de la philosophie des Lumières comme ayant été un des agents à l'origine de la Révolution française.

En nous référant à ces différentes argumentations sur l'origine de la Révolution française, nous proposons une réflexion sur le rôle de la littérature libertine et sur l'influence qu'elle a pu exercer sur la Révolution. L'objet de notre analyse est *Thérèse philosophe*, texte qui est considéré comme constituant le cœur même de la littérature libertine, et qui a été un bestseller dans la deuxième moitié du XVIII^e siècle. Nous lirons ce texte en essayant de comprendre le point de vue d' « un lecteur imaginé » appartenant à l'époque en question. La clef de cette lecture sera trouvée dans le texte même. Les sujets en jeu pour édifier « le lecteur implicite », selon donc « l'auteur implicite », y sont en effet inconsciemment indiqués. D'après le texte, ces

sujets appartiennent aux domaines de « la morale, la métaphysique et la religion ». Il est cependant difficile de décider si « un lecteur imaginé » au siècle des Lumières a bien compris et intériorisé ces sujets ou non, puisque l'acte de lire relève de la vie intérieure. Mais nous savons aussi que l'acte de lire est plus ou moins déterminé voire réglé par la culture de l'époque. Les lecteurs au XVIII^e siècle auraient donc lu *Thérèse philosophe* avec une compréhension le plus souvent à peu près similaire.

Il est difficile de dégager l'influence directe qu'a pu avoir la littérature libertine sur la Révolution française, mais nous pouvons du moins remarquer une influence indirecte, surtout à travers ses critiques lancées contre la religion chrétienne.

Nous remarquons également que la littérature libertine a conduit les lecteurs à tourner leur regard vers la réalité. Le plaisir sexuel que met en scène la littérature libertine est un bonheur réel, qu'on peut sentir ici-bas, et non un bonheur abstrait qui n'existe que dans l'au-delà, comme celui que le christianisme prêche au public. La littérature libertine a donc contribué à déplacer le point de vue en le détournant de l'autre monde pour le réorienter vers le monde réel. Et c'est ce déplacement de point de vue qui a conduit les lecteurs à la critique de la société du XVIII^e siècle, critique qui trouvera son écho dans la Révolution.